

雨後登樓（釈絶海）

一天過雨洗新秋 携友同登江上樓
欲寫仲宣千古恨 斷烟疎樹不堪愁

解説 この詩は、王粲の「登樓賦」をかりて、心中の憂慮を述べたもの。

一天の過雨 新秋を洗う

友を携えて 同じく登る 江上の樓

写かんと 欲す 仲宣 千古の恨

断烟 疎樹 愁に 堪えず

語釈 ※一天Ⅱそら一面、満天の意。 ※過雨Ⅱ通り雨。 むらさめ。

※新秋Ⅱ初秋。 ※欲写Ⅱその昔、落魄の身を悲しんで「登樓の賦」を作った王粲の恨みを想いだしてそれを写しだそうとした。 ※仲宣Ⅱ王粲の字。後漢の人。 建安の七才子の一人。 漢の滅亡後、魏に仕えた。

※千古恨Ⅱ遠い昔の王粲の無念な思い。 ※断烟Ⅱ烟は、霏・霧・霞。 ここではちぎれちぎれの霧。 あちらこちらにこめる霧。 ※疎樹Ⅱ葉が落ちて枝がまばらに見える樹木。

通釈 通り雨が過ぎて、初秋の空は洗われたように晴れ渡り、一段と爽快なので、友人と水辺の高樓に登り、眺望を楽しんだ。 その昔、落魄の身を悲しんで「登樓の賦」を作った王粲の恨みを想い出して、それを写し出そうとしたが、霏、霧の間から葉の落ちた木々しか見えず、この風景が寂しく、愁いに堪えられなくなってしまった。